

編者まえがき

この「アジア文化研究」別冊 14 号に掲載されている論文は、国際基督教大学アジア文化研究所が主催、ないしは共催した二つの学術フォーラムに於いて発表された研究をもとに、まとめられたものである。

アジア文化研究所は毎年シンポジウムを開催しているが、2003 年 12 月 6 日に「視覚化された近代性——19 世紀後半から 20 世紀半ばまで」と題するシンポジウムを行なった。下記の諸氏に発表をしていただき、大変活発な討論が行なわれた。

「李王家美術館にみる近代日本美術—統治戦略としての visual images」李成市（早稲田大学）

「国民国家の視覚化—ロシア人の意識における極東」Yulia Mikhailova（広島市立大学）

「戦争美術の語法と文脈」河田明久（早稲田大学）

「身体美醜という運命—近代日本エリート層の人種的ジレンマと其の可視化の系譜」真嶋亜有（国際基督教大学）

本書はこのシンポジウムの報告を特集する予定であったが、諸般の事情から果たせなかった。李成市氏は、シンポジウムでの発表内容の大部分を既に他で刊行されていることから、今回はご寄稿なさらなかった。Yulia Mikhailova 氏の発表内容については、既刊の「アジア文化研究」27 号掲載の “Laughter in Russo-Japanese Relations: Comic Pictures of the Russo-Japanese War” を参照されたい。真嶋亜有氏は体調を崩されたため、本書にはご寄稿いただけなかった。本書に掲載された河田明久氏の論文は、本書のために新たにご執筆下さったものである。

またアジア文化研究所は、明治学院大学国際研究学部および上智大学比較文化研究科と共同で Asian Studies Conference Japan (ASCJ、日本アジア研究学会) を組織運営している。この学会は Association for Asian Studies の協賛を得、毎年上智大学市ヶ谷キャンパスで 2 日間にわたる大会を開催している。本書は、2004 年 6 月 19 日、20 日に開催された第 8 回大会の部会 “An Appraisal of How Japanese Textbooks Discuss Major Diplomatic Events of 1900–1941” における報告を特集している。ここでは、いわゆる「教科書問題」に関する多角的な検討が行なわれ、非常に有意義な議論が交わされている。

最後に本書は、アジア文化研究所顧問である源了圓氏の、「天道覚明論」に関する論文を掲載することができた。

2005 年 3 月 31 日

高澤 紀恵